

第93話〈親族会議〉の要約と参考資料

第93話〈親族会議〉の要約

大切坑の対岸に建っていた「樋の口」は、鉦山に坑木や建築材を売って共栄する関係をもつ一方で、激しい毒煙の被害を受けてきました。「板ばさみじゃったとよね」と土呂久の人たちは言います。その家の歴史から、複雑によじれた土呂久公害の実相を教えられます。

第93話〈親族会議〉の参考資料

93-1 樋の口の移転

移転歴（土呂久での聞き取りによる）

1. 樋の口 昔～昭和10年
2. 荒地の脇 昭和10年～昭和12年
3. 中町 昭和12年～昭和22年
4. 樋の口 昭和22年～昭和45年12月
5. 寺尾野 (子どもだけ預ける)
6. 現土呂久山荘 昭和45年12月～昭和47年1月
7. 大野原 昭和47年1月～

93-2 樋の口の土地の鉦山への売却

佐藤仲治さんの話（1978年聴取）

樋の口は昭和7年に家、屋敷をみんな中島に売った。価格が9千何百円で。本屋（もとや）に、三ヶ所鉦山（日本窒素がやっていた三ヶ所の廻り淵鉦山）が休止になったんで、あそこの従業員が何十人も来た。まだ長屋がよけいになかったから。25、6畳の広間に何十人も追い込んだ。樋の口の背戸から前に長屋をつくって、従業員を長屋に移した。樋の口の家は「倶楽部」になった。助さんは、2間半か3間角の倉庫を「中町」（静男さん方）へ移転して、牛がおるから、わたしとこ（「荒地」）すぐ脇に小屋を建てて、1年ばかりここに住んだ。台風の時期に、裏の畑の土手がくえて、家を押しつぶしたもんじゃき、静雄さん方に戻った。そうして終戦の22年か23年に、それまでダンビュライトが黒葛原越しに出よった。ここが助の土地じゃった。鉦山が鉦石を掘るのにいるので、「山の名義を中島にしてくれ。その代わり、樋の口の前が使われる耕地を戻す」。操方の下は索道ができてとった。使われる耕地だけ戻した。残りの土地は、鉦山が閉山になって尾平に行ったんで、不在地主だから県に買い上げてもらって買収した。家は、内柱を全部切ってしまうと、

倶楽部にしていた。外側の柱しかなかったのを助さんが買収して、百姓することになって、常義が何年かかかりで、みな継ぎ柱して建てた。そうして助さんたちは、あそこに下って農業を始めた。

佐藤ツルエさんの話（1980年3月19日聴取）

樋の口の田畑をズリで埋めてしもて、本調子でうちの上から埋めてきよった。埋めれば、どうこうならんけ、延岡のじいさん（年保）が来て、売らしたつぱい。「持っとつたらぼくばい」。

「鶴」のもんたちや（敬の妻スギヨ、助の妻ヤソは「鶴」の三代士さんの妹）「どげんこつあっても売ったらぼくばい」

「笠」（宝一の妻ミツは「笠」の出）で評議があった。徳一のばあさんが「うちのツボネで評議があったもんじゃ」ち言わした。

年保さんが「持っとつてもつまらん」ち言うんで、売ってしまわしたもんたい。

「荒地」の横道から上、墓道の下を残して、他の土地をみな鉾山に売ってしまわした。

佐藤三代士さんの話（1980年3月20日聴取）

助さんの土地を売ったとき、松尾一男が交渉にあたった。「その土地を売れば、助さんを鉾山につこうてやる」と言うて。しばらくは何百も従業員がいた。鉾毒を樋の口の前の田に流したんで、全然できん。立派な田だったのに。山裏から索道があそこで折れて……。

93-3 樋の口と鉾山の関係

佐藤仲治さんの話（1980年3月17日聴取）

「樋の口」は川田のころから、鉾山との付き合いが深かった。中島になってからも、助さんは土地を提供したかげんか、付き合いが深かった。田植えのとき、会社の幹部が来よった。鉾山に稼ぎにきた女の人が手伝いに来た。末は長屋ができて、前も後ろも長屋ばかり。だいたい樋の口の前は田、後ろは畑だった。結婚式のときも、会社から来る。敬さんの結婚式のとき、ツルエさんの祝儀にも。

富高ツユ子さんの話（1979年4月20日聴取）

「樋の口」は板ばさみじゃったとよね、本当は。

93-4 農業を断念した樋の口

佐藤仲治さんの話（1978年12月1日聴取）

長屋ができたときに、霜が降れば地だが凍る。下から凍がもちあげると、じるいからじ

るねえごつ、焼き殻を持ってきて広げた。いまだに、耕地にしてもできんわけたい。

佐藤来、仲治、トネさんの雑談（1977年5月15日聴取）

私たちはご先祖様の財産を守って、次へ受け継いでいく。ところが樋の口は、田畑は荒れ放題。山も伐ったら伐りっぱなし。あと植林しようとはしない。あれではダメだ。樋の口は女の子ばかり。ツルエさんは「大学出の養子をもらおう」と盛んに言いふらしていたが、それが齋藤先生。齋藤先生も長男だし、養子には来るもんな。大学出たからといって、百姓をやれるわけじゃねえ。

93-5 樋の口の農地のあとに建った社宅

佐藤仲治さんの話（1977年5月14日聴取）

「樋の口」は1枚で5反ある畑、その上下に田もあった。これを鉦山は買って、従業員の畑にした。従業員が野菜つくり、虫がわいてしょうがないというんで、亜硫酸を畑に撒いた。そしたら、できんのよ。亜硫酸は農薬なるというんで、亜硫酸をガンガンに一つも二つもふっていた。「おかしいな」と思うと、消毒のつもりじゃった。

佐藤正四さんの話（1978年12月12日聴取）

助さんが鉦山に売った土地に、鉦山はだいたい学校をつくると言いよった。しかし、つくらざったですね。

93-6 倶楽部

佐藤仲治さんの話（1978年聴取）

樋の口の家を中島に売ったあと、「倶楽部」になった。そのころ、鉦山の従業員の親睦組織「鉦友会」をつくった。「倶楽部」で、鉦友会の会合をやったり、弁士を呼んで活動写真もした。熊本から松尾の知り合いの漫才師が来た。芝居がくれば金を出して見に行く。活動写真も弁士が来てやる。土呂久の人の娯楽場所やったな。

広さは8間半くらいある。柱を全部ぶちぬいて、体育館のごとある。畳はあったかな？小芹から、立宿へんの者まで来よった。

佐藤操さんの話（1978年12月1日）

倶楽部には、映画とか舞台が来た。床板を下げて、地べたの上で見た。廊下を花道にして出てくる。ズリのある方に舞台がつくってあった。

佐藤常義さんの話（1979年4月20日聴取）

樋の口の外観は今と変わらぬが、中は劇場のようにしてあった。押入れを取り外して、役者のでてくる道（花道）にした。オモテ、ゴゼン、ツボネを全部払うと、柱を何本もとり（上下を残して、中をぼんととっただけ。萩原所長になってから、売っていた土地を原野山林と交換して取り戻したとき、もとのように柱を入れた）、間仕切りをとって、外柱があるだけにした。鉾山の土留めの矢板（1寸くらいの板）を床に敷いた。花道はひと段高くつくった。部隊の広さは幅9尺、長さ20尺、花道は雨戸の内側の縁の高さ。床の高さに舞台と花道があり、客席は低くつくって、天井も張ってあった。

樋の口は、建坪が10間×4間半。観客は最盛期で、通勤者、従業員400人くらいおる。1坪にぎっしり詰めれば16人座れる。入場料なしじゃけ、「みんな行ってみろ」と、付近の部落の人も来た。幕も下がるようにしてあった。

93-7 佐藤敬の死

樋の口の墓碑

年保の長男 敬 昭和12年10月23日 29歳

佐藤操さんの話（1978年12月1日聴取）

胸、気管をやられて、鹿児島国立療養所に行っちゃった。だいぶいいから帰ってきてからのこと。反射炉の煙道を延ばして、煙突の先に刈り干しトーベのようにかぶせてあるのに火がついて焼け始めた。それを家（神地の横の移転先）の二階から見て、親が「療養所から戻ってきたばかりでボクじゃが、火消しに行かんでもいいが」ち言うのに、消しに行つて、亜ヒ酸を吸うて、それがもとで死んだ。「あげなこたせにゃよかったのに」と言いよったですわ。帰ってきたとき、えらい亜ヒ酸の粉をかぶっちゃった。

佐藤仲治さんの話（1978年12月1日聴取）

わたしと同級生（明治43年生まれ）、身体が弱かったけ、助さんに仕事をまかせて、自分は養生ばかりに。年保さんとか、病院に行つとった。胸が悪かったごたる。「肺浸潤」ち若いときから言いよった。

敬さんが詠んだ歌

亡き吾子と共に植えにし草花の 花咲くときは胸迫りけり

*吾子は、康男 昭和10年7月7日 6歳のことか？

93-8

1974年11月2日夕刊デイリー紙の記事

土呂久の原点 中島鉦山社長・鈴木仙氏インタビュー

—— 新聞記事で土呂久公害を語る地域民の表情をどうみるか——

鈴木 新聞で語る人々の心情が、土呂久地域民全体を代表するものか、どうかはわかりませんが、公害問題とは切り離して「土呂久鉦山の歴史」の一端と思って聞いて頂ければ幸いです。

私が土呂久鉦山を手に入れたのが昭和 8 年です。地域の人々は鉦山、あるいはわたし個人と約 30 年間もおつき合いましたわけで、ふり返ればみんな懐かしい人ばかりです。私が最も親しくしたご一家は佐藤操さんのご一家でした。とくにお世話になったのは操さんの祖父の年保さんで、わたしが土呂久に手をつけたころは 40 歳過ぎの働き盛りでした。年保さんはそれまでに、東西臼杵郡内から大分県内にかけて、露頭している硫と鉦をみつけて歩き、山主とは「きん先掘り」で契約しく註、どれだけ掘って、いくら支払うという歩合の方法、坑内掘りでなく、露頭掘りで探鉦し、その現場で炭ガマ同然の粗末なカマで亜ヒ酸焼きをした人です。だから土呂久ではいつも会社の相談役みたいな立場で「煙が出なければダメだ、煙が多いほど日ゼニが土呂久にはいるんだ」と、威勢のいい人でした。昭和 16-17 年ごろに延岡市に居を移されたようで、たしか岡富の甲 336 番地だったか、ハッキリしない記憶ですが……。その年保さんの子に敬さんという人があって、敬さんの長男が操さんになるわけです。しかし操さんは、年保さんの養子に（つまり叔父さんの養子）なって、土呂久に残りました。そうした関係で助さんも会社に坑木納入するなど取引以上の取引関係があったものです。土呂久の操さん宅の横に白壁の土蔵があるはずですが。その敷地は鉦山所有のものでした。お互いの関係は利便さを分け合う仲だったので、問題も起きなかったのですが……。いまとなると。

土呂久には亜ヒ酸帯に小さな坑道が沢山残っています。坑口の小さいのは中島鉦山のじゃないのです。川田一年保さん時代のモノで、土呂久美人といわれた娘さんたちがミカン箱を背負って、坑口をはって出入り亜ヒ酸を運びだしていたものです。操さんの娘ムコに当たる方が土呂久公害を全国に発表された斉藤先生です。もちろん、現在のご一家に公害の責任はございませんが……。わたしは古い型の人間なので、ついグチっぽくなりますね、因果、因縁とでも申しましょうか。